

以下に、『21世紀社会変動の社会学へ』および『主権者と歴史認識の社会学へ』（いずれも新曜社、2020）の最終段階のまえがき、目次、および凡例を掲げます。図書館や研究室にお入れいただき、ご批判を shoji@L.u-tokyo.ac.jp にいただければ幸いです。個人購入の場合、同じメールアドレスにご連絡をいただければ出版社に著者割引で送らせてます。

まえがき（『21世紀社会変動の社会学へ』用）

21世紀も第2のディケイド（10年）の最後に近づき、社会の大まかな仕組み（構造）が見えてきている。端的に言えば、それはますます世界化し、地球化してきている。社会の実態は世界的規模でしかとらえられず、地球環境への溶け合いのなかでしかとらえられなくなっている。

日本は、「美しい日本」などと言いながら自らを閉ざし気味であるが、労働力不足から「移民」と言うべき人びとを受け入れざるをえなくなったり、気候変動のため、より頻繁でよりひどくなる大雨や台風などに苦しめられてきている。少子高齢化の趨勢も押しとどめがたく、年金を初めとする福祉制度もいつまで維持できるのか定かでない。

バブルがはじけていらい停滞気味の経済を活性化させ、平和国家として、複雑な東アジア、東南アジアのなかで有意義な役割を果たしていけるのかも、今のままでは明らかでない。世界と日本の21世紀社会変動を正しく把握し、それに合った社会の変え方を考えていく必要がある。

本書は、このような問題意識から、21世紀社会の一次構造をまずとらえ（冒頭の庄司論文）、理論を整備してその概要を把握したうえで（次の庄司論文）、現代社会学の理論を参照する（赤堀論文）。現代社会学はこのような自省的考察を重ねて成立する。本書はそのうえで、共同性形成の要となる食と農および知識をめぐるコモンズづくりの動きを吟味し（立川論文および岡野論文）、生産様式としての資本主義の耐久性を検討しつつ（山田論文）、具体的に東アジア・東南アジアの状況を見たあとで（中村論文）、事業体としての企業コミュニティの有効性を再検討し（呉論文）、現代的主体性となりうる集合性の可能態を追求する（丹辺論文）。

21世紀社会の基礎となる共同性が食と知のコモンズとして追求されているのであるから、私たちはそのうえに立って階層性を緩和し、地球生態系としての自然と身体を最大限に生かす、新しい総体システムのあり方を考えるべきであろう。本書はその方向が、個人化と利益追求の動きが拡大し重層する現実の背後で、新たな価値を追求しそれらを集合化しようとするさまざまな動きのなかに、協同的な事業の拡大と民主的選挙における寛容で改革的な多数派の形成として現れるであろうことを、共同研究の成果として各論の個性を残しながら展望しようとしている。

この意味で、21世紀社会のあり方を民主協同社会と考え、その担い手を政治的にとどまらず経済的にも前進していく主権者に求めることは、正統的であるばかりでなく正当でもあるのではないかと。読者に問いたい。

2020年3月
編著者

21 世紀社会変動の社会学へ

——主権者が社会をとらえるために——

《現代社会への見方を変える》

21 世紀社会の一次構造——「ニューノーマル」な現実をふまえて——

庄司 興吉

《現代社会の概要を把握する》

21 世紀社会の概要と主体形成

——社会理論と現代の問題・歴史・構造・意味・戦略・主体——

庄司 興吉

《現代社会学の理論を参照する》

社会学にとっての時代の課題と解決策——不寛容社会を題材として——

赤堀 三郎

《市民として食と農を支える》

現代社会における食と農——市民とコモンズの観点から——

立川 雅司

《情報ネットワークで市場を超える》

「情報の消費化」と情報のコモンズ——レッシングのコモンズ論を手がかりとして——

岡野 一郎

《事例に即して資本主義の今後を考える》

資本主義はいかにして終わるのか——移行論の新たな展開に向けて——

山田 信行

《東アジア・東南アジアを重視する》

一体化する東アジア・東南アジアの産業構造

——インドネシアと日本の関係を中心に——

中村 真人

《事業体としての企業コミュニティを再検討する》

企業コミュニティと労使関係——日立と資生堂労組の事例を中心に——

呉 学殊

《現代的主体性の契機を見出す》

階層研究の死角と社会学的伝統の射程——集合性をめぐるアプローチ——

丹辺 宣彦

凡 例 (『21 世紀社会変動の社会学へ』用)

1 本書は、共同研究の成果を編者が有機的に編集して成っている。目次および各論文冒頭で《》で囲み、ブロック体で示したのは、本書の構成のなかでの各論の役割である。次の主題と副題は各論の執筆者による。

2 各論は、節を 1, 2, 3...などで示し、小節を 1.1, 1.2, 1.3...などと示すよう統一している。

3 各論は、本文、注、参考文献、という順でまとめられている。

4 本文中で参考文献を示す場合には、(著者姓 発行年：ページあるいは章、節) などとなっている。

5 各論末の文献リストは、著者名 ABC 順である。判別しやすいよう、2 行以上にわたる場合には 2 行以下を全角 2 字ずつ下げている。同一著者の作品の場合には——— (全角 5 字分) で示している。

6 索引は、事項索引、人名索引とも、編者が、本書のタイトルと副題に沿って、重要と思われる概念、用語、人名を選択して作成した。該当項目について調べやすいよう、また全体を見渡したばあい、本書の視野と内容が分かりやすいよう、最大限の配慮を施したつもりである。

まえがき（『主権者と歴史認識の社会学へ』用

21世紀社会の形と方向性が見えてきて、私たち主権者はそれをとらえ、対応するよう迫られている。そのために私たちは、自分が主権者であることをどこまで自覚しているか、反省してみなければならない。少し前に有権者年齢が18歳にまで引き下げられて、主権者教育などが云々されたが、すでに主権者になって久しい、いや歴史的によく考えれば、まだまだ間もない私たち自身、どこまでその意味を理解しているだろうか。

「王は君臨すれども統治せず」のもとの言い方が、”The Sovereign reigns, but does not rule.”だと知って、私は驚いたことがある。王とはSovereignのことで、市民たちはその王から統治する権利、すなわち主権Sovereigntyを奪って、自分たちが主権者sovereign peopleになったのである。だから、統治するために私たちは自分たちの社会がどうなっているのかを知らなければならない。社会学とはそのための学問なのではないか、ということに気がついて私は愕然とした覚えもある。主権者といえばある年齢以上の全員なのだから、誰でもが主権を行使するために使えるような、そんな社会学があるであろうか。

本書は、そういう理由から、私たちの社会の歴史を認識して、少しでもその形と方向性が分かるよう、6つの論文を有機的に編んでなったものである。

最初の論文で、編者は恥をさらして、自分の主権者歴を反省し、自分が、これがそうだと考えてきた社会学が本当にそうなのか、を問う。次いで富江論文は、ほぼ1世紀さかのぼり、日本人にまだ憲法上の主権がなかったころ、生存権ならぬ生活権を求めて主権者として苦勞した人びとのことを跡づける。それから佐久間論文は、日本人が思い上がって植民地をつくり、さらに思い上がって新しい理想の国家を建てるのだなどとうそぶいて、そのために社会学を利用しようとした、ある人物のことを追う。

戦後になり、日本の社会学はこうした過去の動きを反省し、少しでも日本の主権者のためになろうとしてきたが、奥村論文は、そうしたなかでもとくに困難な問題、いかに懸命に、あるいは誠実に生きても、私たちは皆いずれ死ななければならない、という問題にどんなふうに取り組んできているかを取り上げる。そのうえで、編者はあらためて、できるだけ分かりやすい歴史のとらえ方、つまり歴史認識を検討し、多くの人が良しとしてきた市民社会にじつは大きな問題があったのではないかと主張する。なぜなら、21世紀社会は、明らかに形が変わってきていて、その問題を解かないととらえることができないのではないかと、思うからである。

率直に考えてみよう。30年前、私たち主権者は、21世紀の今の社会を予見できていたろうか。ソ連東欧が崩壊し、中国やインドやその他多く、かつて市民社会の従属国や植民地であった国ぐにが、それぞれすごい勢いで成長してきて、アメリカやヨーロッパや日本をおたおたさせ、世界の仕組みを変えてきているのではないだろうか。

本書は、この問題に真摯に取り組む、自分自身を含む主権者に少しでも役に立つような社会学を創ってみようという、試みである。できるだけ多くの主権者にお読みいただき、その不十分さを叩いて議論していただければ、と心から思う。これはそういう意図からの試供本である。

2020年3月
編著者

主権者と歴史認識の社会学へ

——21世紀社会学の視野を深める——

《主権者であることを反省する》

戦後史認識から主権者のための社会学へ

——自分史から地球社会論への展開——

庄司 興吉

《戦前期の良き遺産を継承する》

1910-20年代日本における「生活」と「生活権」の言説

——生活保障をめぐる“自由と国家”への現代的一考察——

富江 直子

《日本社会学の過去を直視する》

新明正道の「東亜論」

——矢内原忠雄の「満州論」との関連で——

佐久間 孝正

《現代日本社会学の創造性を生かす》

不調和からの創造性

——戦後日本の3人の社会学者をめぐって——

奥村 隆

《21世紀社会のための社会理論を構築する》

歴史認識をふまえた社会理論の形成

——共同性・階層性・体系（システム）性から地球社会の理論へ——

庄司 興吉

《21世紀社会変動のダイナミックな現状分析へ》

21世紀社会の現段階と課題

——歴史の現段階と新しい社会理論の必要性——

庄司 興吉

庄司論文文献

凡 例 （『主権者と歴史認識の社会学へ』用）

1 本書は、共同研究の成果を編者が有機的に編集して成っている。目次および各論冒頭で《》で囲み、ブロック体で示したのは、本書の構成における各論の役割である。次の主題と副題は各論の執筆者による。

2 各論は、節を 1, 2, 3...などで示し、それ以下の区切りはボールド体の小見出しで示している。

3 各論は、本文、注、参照文献、という順でまとめられている。

4 本文中で参照文献を示す場合には、（著者姓 発行年：ページあるいは章、節）などとなっている。

5 各論末の文献リストは、著者名 ABC 順になっている。判別しやすいよう、2 行以上にわたる場合には 2 行以下を 2 字ずつ下げている。同一著者の作品を挙げる場合には 2 回目から著者を———（全角 4 文字分）で示した。

6 索引は、事項索引、人名索引とも、編者が、本書のタイトルと副題に沿って、重要と思われる概念、用語、人名を選択して作成した。該当項目について調べやすいよう、また全体を見渡したばあい、本書の視野と内容が分かりやすいよう、最大限の配慮を施したつもりである。